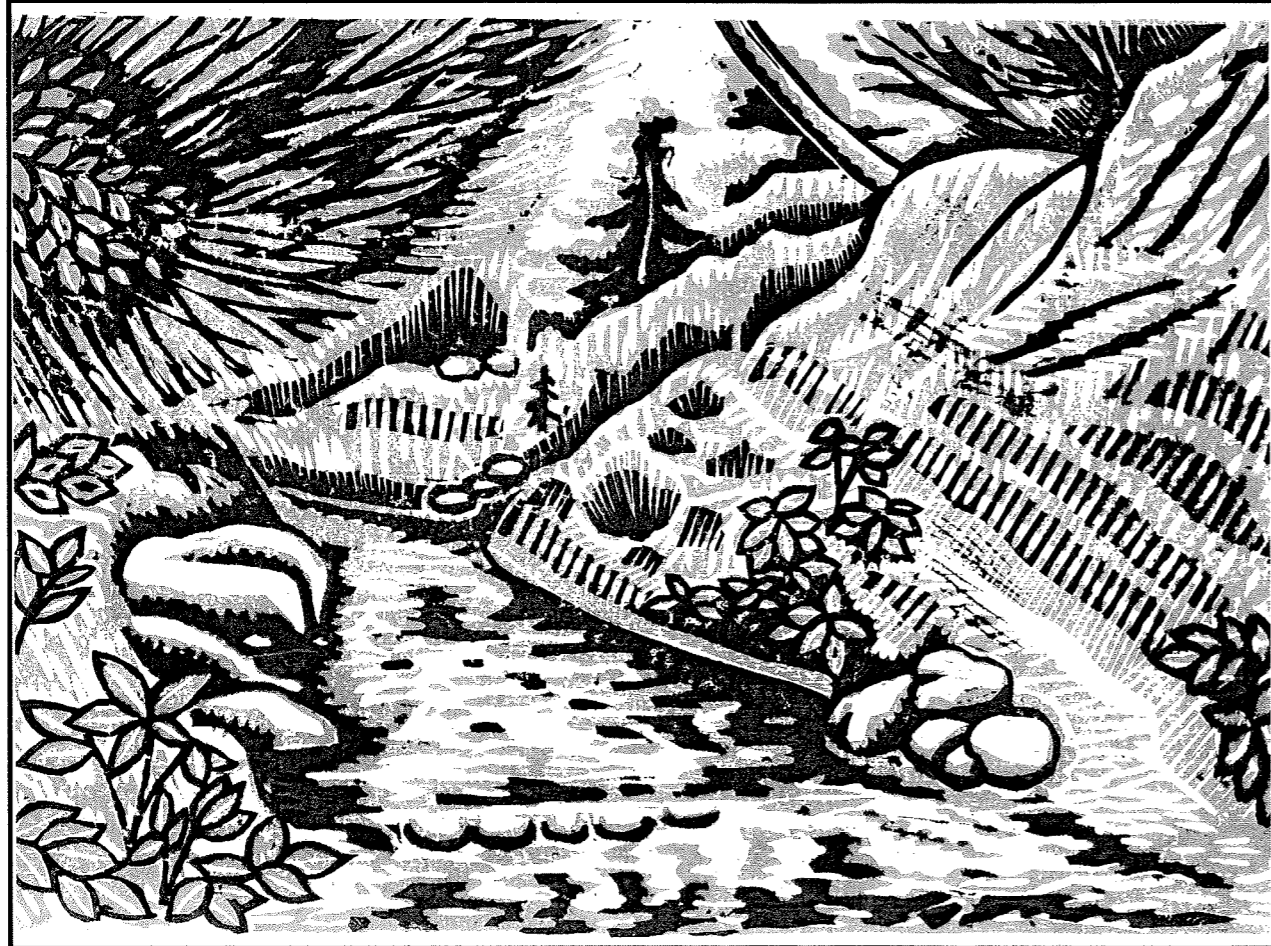


いたちかわおたすけたい

鮎川・狹川・川原番・瓦版 春号



版画 宗森英夫

いたち川の流れ出す溪谷の森（源氏ヶ丘の奥）

「まほろば」と仙人

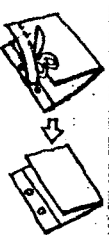
源流域の変遷を描き続けて

相模と武蔵の国境は相模湾と江戸湾の分水嶺だが、その分水嶺は鎌倉へと通ずる。その西麓にいたち川の源流がある。この人里離れた緑豊かな「まほろば」は、昭和一八年相武トンネル開通を機に変身をはじめ、空間六浦道に人車が行き交うようになり、先ず長倉町辺りに人が住む。

首都圏への人口流入に伴い、道の反対側にも昭和三十一年、源氏が丘分譲地ができ計六軒が居を構える。その後、電気ガス水道などが余りの不便な生活に耐えかね、五軒が次々と転出する。そんな中で、朝比奈の井戸職人のおかげで飲料水を確保した守田家だけはそれからずっとまほろばと共にある。洋画家守田守さん（八十四歳）はその風貌からいつしか「仙人」と呼ばれる。その後、一軒だけは戻る。昭和三十六年、野七里の鉄塔建設のため、広々とあった営場が削り取られ景観が一変する。更にまほろばにはもう一つの試練として焼却場が設置された。この地は、きのことり、篠竹とり、炭焼きの人達が入る見事な雑木林だったが、今は残念ながら荒れるに任されている。水量を増やし水質も良くして早く以前のように、ホタルを復活乱舞させたい。仙人はまほろばの環境保全を訴える。今年も下草刈り・枝落とし・そして補植に精を出し、寸暇を惜しんでこのまほろばをキャンパスに収めていく……

(河原野記)

この部分を切り取ると便利です。



『第9回いたち川シンポジウム』行われる！

第9回いたち川シンポジウムが、去る3月25日（土）地球市民神奈川プラザで行われ、約60人程の参加がありました。いたち川シンポジウムは「いたち川と親しむ会」という市民グループが毎年実施しているものです。同会は「We Love いたち川」を合言葉に活動しており、その活動のひとつにいたち川シンポジウムがあります。

今回のシンポジウムの特徴は、プログラムから分かるように、いたち川に関係した団体及び学校・個人がそれぞれの活動成果を発表しあったことにあります。

当日のプログラムは

【基調講演】

テーマ・・・いかに遊びをして10年、その意義とこれから
講師・・・「いかに遊ぶ谷本川」代表 松木 房子さん

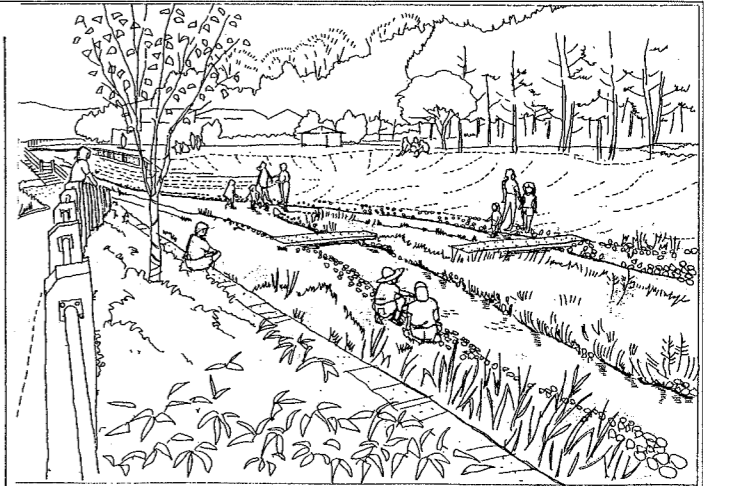
【活動・調査報告】

- 「いたち川の水質調査報告」
いたち川と親しむ会、市立本郷中学校科学部、
県立柏陽高校理科部、
横浜市水質検査員（吉川さん）
- 「いたち川の魚について」
市立本郷小学校 高野さん
- 「いたち川で遊んで」 市立本郷中学校探検部
- 「いたち川を守って」
天神橋～新橋水辺愛護会、
稲荷森の水辺愛護会、八軒谷戸の水辺愛護会
- 「活動報告」 いたち川IOTASUKE隊
- 「考えましょう」 ボランティアさかえ
- 「スライドによるいたち川の生き物紹介」 林さん

活動・調査報告後、横浜市立大学の村橋教授から講評をいただきました。

その内容は、『継続することの大切さと、多くの団体等があつまることの大切さと意義』について話されました。

最後に、いたち川シンポジウムが毎年実施され発展することを願うものであります。（一隊員）

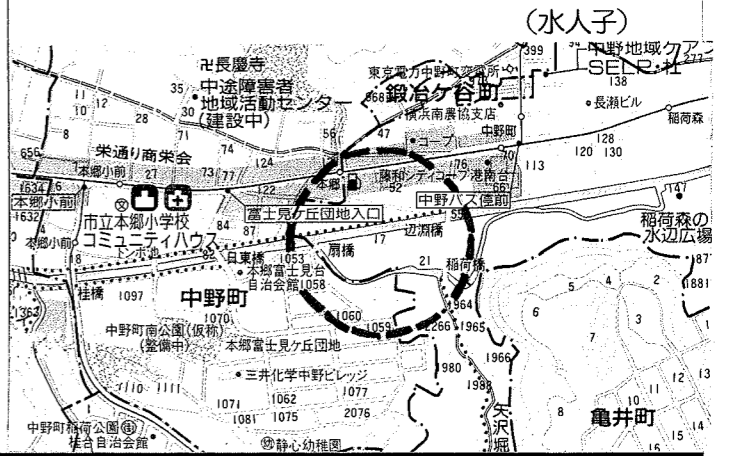


（仮称）上郷第一公園の
基本計画案がまとまる

2月12日（土）、最終回のワークショップが開催され、今までの話し合いの結果をまとめた基本計画案ができました。

参加者は、三回の会議と“さいと焼き”で、延べ500名になり、小学生から地域住民の世代を越えたコミュニケーションをはかり、公園の課題点を認識しあいながら計画をまとめました。

- ①広場について、草の案とダスト舗装（運動場のような）で検討し、ダスト舗装に決まる。
- ②小さな子供の遊び場について、位置は広場の北側で遊具はブランコやすべり台、その他の遊具については、広場の広さなどを考慮して検討していく。
- ③トイレについて、車椅子で利用できるタイプとし管理については、地域と話し合いながら決めていく。
- ④植栽について、シンボルツリーは、多くの意見が出されている中から、大きさ、位置を検討する。
- ⑤その他、ベンチや水飲みなどの施設は、壊れにくいものを検討し、入り口には車止めを設置する。



発行：狹川IOTASUKE隊（いたちかわおたすけたい）

発行年月
2000年4月

（通刊9号）

OTASUKE隊事務局：栄区役所区政推進課企画調整係 〒247-0005 横浜市栄区桂町303-19
TEL 045-894-8331 FAX 045-895-2260
栄土木事務所下水道係 〒247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷1-6-1
TEL 045-895-1411 FAX 045-895-1421
（お便り・お問い合わせはこちらまで）

いたち川の橋と言い伝え (Part 3)

①学校橋
現在の柏陽団地に、昔、本郷小学校が建っていた。桂・公田方面の学童がこの橋を渡って通学するため「学校橋」が架けられた。現在、すぐ側にある柏陽高校の創立以前からここに架かっていた。



②石橋
本郷方面から七曲を通って横浜方面にお茶を運んだためか、「茶道橋」と呼ばれていた。江戸・明治の初めの頃まで「茶道橋」は、壊れた船の板を使った木橋だった。明治の半ば以降、道路改修により石橋に架け替えられ、その頃から「石橋」と呼ばれるようになった。大正になってから、石橋からコンクリートの橋になったが、名前はそのまま残った。当時の石橋の石が本郷小学校の門柱になっている。

③駒形堂橋 (こまかんどうはし)
昔、この近くに駒形観音堂があったので、橋の名として残った。

④慶長橋
長慶寺の前に架かっている橋なのに長慶橋でなく慶長橋というのはなぜか？

⑤ふじ橋
「ふじやま」の下にあるので「ふじ橋」なのだろう。「ふじやま」の頂上には、富士講の信仰の対象となる富士塚がある。

⑥大橋
大橋の名は、橋の上からどの方向の道路を見ても「大」の字に見えたから・・・(89年間近くに住む長瀬亀吉さんの話)

⑦蛇橋 (あぶはし)
若竹町に蛇名(あぶな)という地名があり、「蛇名橋」というべきところ、「危ない橋」と間違われるのを嫌って、「名」を削ったのであろう。

⑧押切橋 (おしきりはし)
昔、大雨のたびに堤防が決壊し、橋が流されたために名付けられた由。その時、瀬上沢が、現在の神奈中本郷車庫あたりを流れて、いたち川本流と合流し、その辺は石がゴロゴロしていたので「石原」と呼ばれた。押切橋を地元の人は「ほっきりはし」と呼んでいたようだ。

⑨瀬上池 (せがみいけ)
だれが作ったのか未だわからないが、文化文政の頃だろう。当時の大きさは、東西約24m、南北約154m、深さは平均3mと伝わっている。灌漑用の溜め池として作られ、稲作に役立てられた。

ゲンジボタルの幼虫は、流れのあるところを好み、主にカワニナという巻貝を餌にしており、ヘイケボタルの幼虫は、流れのないところ(田んぼや湿地)を好み、モノアラガイという巻貝を餌にしている。いまでは水田が非常に少なくなったため、ヘイケボタルの数は激減している。
ホタルが光るのは、オスとメスの会話であることが知られている。したがって、人家の近くや街灯などの人工光の多い場所では繁殖しない。ホタル観察では、懐中電灯は照らさないこと。
横浜市内には、この他にクロマドホタル、ムネクリイロボタル、オハボタルなどが生息しているが、いずれも幼虫は陸上生活をし、水中では生活しない。(3月5日)



ゲンジボタル
体長15~18mm
胸の中央に黒い十字形の模様がある。



ヘイケボタル
体長7~10mm
胸に太くて黒いすじがある。

発生する時期は、年によってスルルが、ドクダミの花が咲き始めると、ホタルが飛び始める。大体、ゲンジボタルは五月中旬〜六月中旬、ヘイケボタルは六月中旬〜七月上旬に見られる。

いたち川周辺の生き物⑧
光で愛を交信するホタル
いたち川の源流部では、横浜自然観察の森(ゲンジボタルの谷、ヘイケボタルの湿地)、瀬上市民の森(瀬上池→上郷高校下)、荒井市民の森(平和ゴルフ場奥)など数カ所でホタルが見られる。

毎年のようにいたち川でカルガモが子育てをし、その子育ても厳しい自然の営みの中で悲しい結末を迎えることもあります。そんな中、昨年九羽の雛を二羽も失ったことなく育てたカップルの話をします。
五月末に一組のつがい九羽の雛がかえりました。さっそく母鳥を先頭に、茶色のまりのような雛たちが「チヨ」「チヨ」行列をついて従い、一番後ろを父鳥が守るように泳ぎ、夕方になるとねんねへと帰ります。ふんわりとした枯草の上で羽を広げた母鳥の胸の中に優しく包まれ、雛たちは静かな眠りにつきます。少し離れた石の上では、父鳥が見張っています。
三日ほどすると結構遠出をするようになります。水辺の仲間たちにお披露目します。父鳥は近くで見守りますが、母鳥が好奇心旺盛な雛たちを悪戦苦闘し、迷子子はいないかと行き来します。雛は雛で母鳥から離れたことに気付くと一目散に戻り、また道草です。
感心させられたのは、危険が迫ったときも迷い子をさがしに行くとすぐに一ヶ所に雛を集めますが、雛たちは母鳥の教えをきき守るようついで、ひとつの塊になってじっと待つことです。日毎に体も大きくなり個性も現れ、いつも母鳥を遠く甘えん坊、冒険大好きいたずらっ子たちと、私たちが少し安心して見ていられるようになります。幸い大雨に見舞われることもなく産毛が生え替わる頃よりめざましい成長ぶりです。よく食べてアツアツの間母鳥と区別がつかなくなり、特に人目を引いたのは、誇らしげに九羽の雛を連れての行列、道草をして親と離れてしまった雛、いたちの親子像の堰を懸命に上り下りする姿や、海軍橋下の小さな滝をすべり台のように楽しげにすべる雛たちです。また片時も雛たちから目を離さない姿勢と、意地悪トリオの黒たち(アヒル)に敢然と立ち向かう勇氣には教えられるました。さて今年はいかなるドラマを見せてくれるのか今から楽しみです。(あひる)